

# 佐渡学センターだより

佐渡学センター  
(佐渡市教育委員会社会教育課)  
2012年11月30日(金)  
第7号

## 資料の大切さを自覚して！

佐渡学センター次長 本間俊一郎

博物館は、人類共有の財産である貴重な資料を分かち合い、文化を継承、創造していく機関です。過去と現在と未来をつなぐことで、豊かな感性と知性にあふれる社会を築くことが使命です。博物館に携わる私たちは、資料を過去から現在、未来へ橋渡しをすることを責務と自覚し、収集・保存に取り組むことがまず求められます。

博物館は、利用したいと思う、あるいは利用の可能性のある様々な人々に対して開かれていなくてはなりません。将来にわたって活用できるよう良好な状態で資料を次世代に引き継がなければなりません。そのため、資料の活用と将来に向けた保存の折り合いをつけることが常に求められています。一つの資料に対する見方は立場によって様々です。必ずしも賛同しない人々、あるいは反対する人々もいるでしょうが、相反する価値観も存在するということを認識する必要があります。博物館を設置することそれ自体が目的となり、なぜ、何のために、設置されるのか。どんな意味をもつ機関なのかについて、もう一度原点に戻る必要があります。

施設・設備の老朽化で保存環境が維持できない。収蔵庫が満杯で収集活動を継続できない。人手不足で未整理資料を整理して活用できない。そんな状況にあっても、収集・保存等の活動に関して、適切な体制を備える必要があります。

博物館のみで資料の継承・保護を行うことには限界があります。たとえば、資料が所在する地域やボランティア等の協力を得て資料を整理し、保存することも考えられます。入場者や収入確保のために展示活動に業務が偏重し、基本的な資料の記録管理や手続きが後回しにされがちとなります。しかし、調査研究に裏付けられた活動によって社会から信頼を得ること、博物館が扱う資料や展示の真正性や客観性を保つことが信頼の源泉となります。そのため、テーマパーク等のアミューズメント施設と一線を画す必要があります。

博物館には、その教育的な役割を開発し、博物館が対象とする地域社会、地域もしくは団体から幅広い来館者をひきつけるという重要な責務があります。教育普及活動によって、博物館と来館者がより双方向に交流し、新たな創造を促すことができます。

博物館は様々な力を秘めています。蓄積した資料と情報を次代に継承するといった時間と空間を超えた責務の他に、同時代の人々と地域にも貢献できます。学校教育をはじめ生涯にわたって学び続けることを支援できます。観光によるにぎわい作り、あるいは医療や福祉などにも役立つことがあります。これらの力の総体が博物館の総合力であり、これを発揮することは、成熟社会に入る我が国にとって意義があります。

(参考資料 日本博物館協会：『行動規範』)

## おとわいけ 県の天然記念物「乙羽池の浮島及び植物群落」



乙和池は、大佐渡スカイライン脇、海拔560mのところであり、自然林のブナ・ミズナラを主とする落葉広葉樹林に囲まれた静かな場所にあります。池の最大水深は、3.5mあります。県内でも、周囲が高木の自然林に囲まれ、浮島が存在するものはこの乙和池だけです。浮島は、植物が腐敗しにくい環境にある場所にできます。浮島の面積は約400㎡で、ノハナショウブ・サヤヌカグサ・エゾミソハギ等の約20種類の草木群落と2～3mの腐食層から成り立っています。また、島の中にはお井戸またはお池と呼ばれる穴があって、島が浮揚する役目を果たしているといえます。一部観光資料等に「日本最大の高層湿原性浮島」「日本一…」との記述も見られますが、国の天然記念物で日本一の浮島と記述している高層湿原性浮島がありますので、日本最大級の浮島といったほうがよいかもしれません。ぜひ、一度足を運んでみませんか。周辺のブナの巨木も見所の一つです。(池田雄彦)

## 史跡佐渡奉行所跡紹介

佐渡の歴史は金銀山に大きく影響を受け、その中心であった佐渡奉行所は相川に置かれました。1600年に相川金銀山の発見があり、1603年～1604年(慶長8～9年)に大久保長安が鶴子にあった陣屋を現在の場所へ移しました。当時は佐渡奉行所という呼称ではなく相川陣屋や石見陣屋と呼ばれ、のちに佐渡代官が佐渡奉行へと変更となった頃から佐渡奉行所と呼ばれるようになりました。

建物は江戸時代に5度の火災にあいましたが、その都度再建され、1859年(安政6年)に再建された建物の大部分が1942年(昭和17年)の焼失まで残っており、明治維新後は、佐渡県・相川県・佐渡郡役所などの行政庁舎として使用されていました。

平成6年度に佐渡金山遺跡(現在は佐渡金銀山遺跡)の一つとして国の指定を受け、平成13年度に御役所を江戸時代の技術により復元公開し、平成16年度には鉱石から金銀を取り出す作業場であった<sup>せりば</sup>勝場をガイダンス施設として公開を開始しています。資料や展示品を陳列して公開する博物館や資料館という形ではなく、当時の技術で復元した建物自体を来館者に体感してもらうことを目的にしており、説明員による案内で見学することができます。(山口忠明)



## 事業報告 新潟大学人文学部・佐渡市教育委員会連携協定 シンポジウム

11月3日(文化の日)に「シンポジウム鬼太鼓ー舞う・叩く・伝えるー」が真野ふるさと会館で開催されました。新潟大学人文学部と佐渡市教育委員会の連携協定による事業としてのシンポジウムも3回目を迎えました。

午前中は、沢根田中の子供豆まき、新穂北方の子供鬼太鼓、夷七ノ町子供鬼太鼓、岩首鬼太鼓、小木の岬太鼓の公演をいただきました。鬼太鼓が様々な類型を持ち、少子化に悩みながらも、各地域が子供たちの伝統芸能伝承に努力している実情が、改めて明らかになりました。

午後からは、民俗学や教育学、文化財保護の見地から鬼太鼓の研究史や地域の伝承における課題についてご講演をいただきました。まず、池田哲夫先生(新潟大学人文学部教授)からは、明治期以来の鬼太鼓研究や能面研究との関連についてお話をいただきました。続いて伊野義博先生(新潟大学教育学部教授)からは、地域における伝承活動と外部団体による協力体制について事例を踏まえたお話をいただき、星野紘先生(東

京文化財研究所名誉研究員)からは、高齢化・少子化・震災の影響で全国的に地域の伝統芸能伝承が危ぶまれていることについてご講演をいただきました。

続いて、会場から寄せられた質問に基づき、鬼太鼓団体の代表者を交えながら活発な討論が行われました。延べ約180名に及ぶ方々から参加をいただき、名実ともに市民参加型のシンポジウムが確立できたことを大きく評価しています。(野口敏樹)



## 佐渡学の散歩道「北沢の選鉱製錬施設群」

### 1. 相川に残る近代鉱山跡

相川地区には佐渡鉱山近代化に伴う施設群が残り、鉱石の採掘→破碎→選鉱・製錬→島外への積出しまでの一連の流れを知ることができます。これらの施設跡は、平成22年2月より国史跡「佐渡金銀山遺跡」に追加されています。

今回は相川の北沢地区に残る選鉱・製錬施設を紹介します。

北沢地区は、濁川の下流域に位置します。南側は佐渡奉行所や京町の町並みが残る「上町台地」、北側は大山祇神社や総源寺がある下山之神町の台地に挟まれ、濁川の両岸に施設跡があります。また、濁川は明治時代以降の切り石積みで護岸が施されています。

### 2. 北沢地区の沿革

江戸時代には、北沢町は買石（製錬業者）がいた場所でした。明治2年（1869）に佐渡鉱山が官営化されてからは、製錬関係施設が建設されましたが、明治20年代には濁川の斜面を削って新たな製鉱所が建設されました。明治30年代からは動力の電化や青化製錬が導入され、昭和期には、浮遊選鉱への切り替えや、国策による金銀大増産に対応するために施設が改築・新築されました。しかし、日中戦争・太平洋戦争の戦況が悪化すると、昭和18年（1943）に「金山整理令」が出され、終戦後も活況を取り戻すことができませんでした。

そのため、現存するのは、昭和15年（1940）頃までに整備された施設です。そして、昭和27年（1952）に

佐渡鉱山が操業を大縮小するのに合わせて北沢地区の施設もほとんどが閉鎖されました。

### 3. 北沢地区に残る施設

#### 旧北沢青化・浮選鉱所

濁川左岸にあり、最も上流側に位置します。明治24年（1891）に完成した沈澱製錬所がこの施設の基盤となったと考えられます。その後、明治39年（1906）頃までに青化製錬、昭和7年（1932）以降は青化製錬と浮遊選鉱の両方を行いました。施設の一部が石造になっており、この施設が明治時代頃の工法で建設されたことがわかります。

#### 北沢浮遊選鉱場

旧北沢青化・浮選鉱所の西側（海側）にあります。現在は鉄筋コンクリート構造物だけが残っています。これは、金銀の含有率が低い鉱石を大量に選鉱することで増産を図るための施設です。

昭和12年（1937）に建設され、昭和13年には5万トン进行处理し、東洋一の能力をもつ大選鉱場でした。坑道から産出される鉱石と相川の海岸にあった洪石を処理していました。（滝川邦彦）



北沢地区遠景

### 琴浦の横井戸 「佐渡学」話題提供者 佐渡高等職業訓練校 講師 小澤三四郎

地域の方の許可を得て、琴浦の横井戸を調査しました。奥行500mと言われている横井戸ですが、中は暗く狭く膝を曲げて腰をかがめないと歩くこともできません。入り口付近は玄武岩の中でも水中火砕岩といわれる軟質の岩盤ですが、途中は貫入岩なのかゴツゴツと鋭い角のある硬岩質で、所によっては水滴が落ちていました。取水点までの500mはとても長く感じました。琴浦の方々が米を作るという希望の力を身をもって感じました。最後の10mほどは、まるで出水に引き込まれるかのように曲がり、真直ぐ出水部に当たっていました。成功直前には、5人交替で1年間掘り続けたと聞いております。当時の方は交代で毎日お米を夢見て掘ったのでしょうか。GEO（大地）の持つ不思議さは人の心も動かし生活を変えるんだという感動を覚え、暗い横井戸の中でしばし立ち止まり、明るい地上に戻りました。



横井戸の取水点

## 掲示板

### 寄贈資料紹介

#### 新潟・金子一三氏資料

旧羽茂町出身で現在新潟市内に在住している金子一三氏より、佐々木象堂作の短冊・色紙・小杯や、佐渡にゆかりのある方々の絵画など12点を、両津郷土博物館へ寄贈していただきました。中でも佐々木象堂作の小杯は鑑定付で、お気に入りのを譲り受けました。



佐々木象堂作「小杯」

#### 相川・本間孝氏 撮影写真資料・図書

相川の故本間孝氏が昭和40年代～平成20年頃に撮影した佐渡の風景・古文書・古絵図・神社仏閣・芸能・民俗・指定文化財・ニュース画像のフィルム・紙焼きをよくまとめたコレクションです。故本間氏の40年に渡る撮影活動の成果と言えます。また、貴重な図書類もあります。今回、ご遺族のご厚意で寄贈していただくことができました。貴重な記録資料として、今後活用させていただきます。



本間 孝氏撮影「牛耕」

### 企画展紹介

#### ・佐渡博合同企画 新春特別展「佐渡市所蔵お宝展」

平成25年1月より、財団法人佐渡博物館と佐渡市教育委員会の合同企画展として、佐渡市合併10周年記念新春特別展「佐渡市所蔵お宝展」が開催されます。

佐渡博物館（佐渡市八幡2041）と両津郷土博物館（佐渡市秋津1596）の2館を会場に、佐渡島内旧市町村や佐渡市において寄贈を受けた貴重な美術工芸品の内、土田麦僊をはじめ佐渡に縁のある方々の作品を中心に特別展示しています。入場料は、佐渡博物館及び両津郷土博物館共通券で通常よりお安くなっています。大勢の方のご来館をお待ちしております。

会期 佐渡博物館 平成25年1月1日～2月28日(木)  
両津郷土博物館 平成25年1月4日～2月28日(木)

### その他紹介

#### 佐渡植物園「大文字草展」報告

去る10月27日～28日、佐渡植物園主催の「大文字草展」を羽茂B&G海洋センターのエントランスにて開催いたしました。今回は、大文字草を中心に秋の山野草が数多く出展され、大変見応えのある展示会となりました。次回は、平成25年3月下旬に「雪割草展」を予定しております。開催の詳細等が決まりましたら、広報等においてお知らせいたします。(須藤洋行)



### 編集後記

過去の記録を大幅更新した猛暑の夏がやっと終わったと思ったのに、急に冷え込み、寒気を伴う時雨が続いております。11月15日の朝、金北山は、冠雪した雄々しい姿を見せました。猛暑の後に、豪雪とならないように願うばかりです。佐渡学センターにやや近い田で、よく自然放鳥のトキが観察されます。人家や農作業の人に近づかず、ほどよい距離を保ちながら、いつも一生懸命にエサを捕っています。自然放鳥が回を増す毎に、こんな姿がより身近に見られると期待しております。豪雪になると、エサ場が制限され、よく観察される場所からトキが離れるかな？と思うと寂しい気持ちになります。(池田雄彦)

発行 佐渡学センター（佐渡市教育委員会 社会教育課）

〒952-0021 新潟県佐渡市秋津1596 両津郷土博物館内 電話 (0259) 23-2100 FAX (0259) 23-4820

ホームページ <http://www.city.sado.niigata.jp/sadobunka/denbun/>